

be report

先人の「防災力」に学べ!

被害をもたらすような異常気象が最近相次ぐ。地球温暖化がさらに進むと、自然災害が深刻化していくことが懸念されている。予測される被害を軽減させる「適応」と呼ばれる対策は待たない。しかし、これまでどおりの金と時間がかかるインフラ頼みの防災には限界がありそうだ。大切な命や財産を守るために、生活に根付いてきた伝統的な防災の知恵を見直すという動きが始まっている。

見直される輪中堤

岐阜県海津市の国営木曾三川公園。度重なる河川の氾濫に悩まされた地域の知恵が展示されている。この地域にあった農家が復元され、天井の滑車に通したロープを引っ張ると仏壇を1階から2階に引き上げられる仕掛けや、軒下につり下げられている避難用の木舟など、当時の水害対策を知ることが出来る。裕福な農家にしかなかったというのが、母屋の隣には石積みの高台を造って避難小屋を準備、食料などが備蓄されていた。母屋自体も濁流が流れ込んでも倒壊しないように、柱の位置などに構造上の工夫がなされていたという。

木曾川、長良川、掛妻川の流域は、近代の治水工事が完成するまで毎年のように洪水に見舞われてきた。被害を受け流す伝統的な防災の知恵が育まれてきた。その代名詞とも言えるのが輪中。集落を取り囲むように堤防をつくることで、その堤防は輪中堤と呼ばれる。当時の暮らしを紹介する史料などを展示する大垣市輪中館の今津利治館長(69)は「堤防をつくるだけでは輪中とはいえない。地域の住民が分担して管理して「共助」という「共助」が前提だった。

しかし明治以降、断続的に行われ

温暖化で増す脅威

自分たちの知らないところで進められてきた防災対策だけでは安心できない時代に入っている。地球温暖化が進むと自然災害の威力は増していくと予測されているからだ。国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の報告書によると、気温が上がると水蒸気量が増え、地球全体でみると降雨量が増える。しかも狭い地域でより強い雨が降りやすくなる。すでにそうした傾向が現れている。気象庁などの報告

書によると、日本でも1時間あたりの雨量が50%以上の頻度には明確な増加傾向がみられているという。この報告書は将来予測も紹介している。温暖化が進むと、こうした短時間強雨の頻度は日本のすべてで増える。台風を中心気圧も下がって強力になる。大きな河川を対象にした研究では、洪水が起る確率は今世紀後半には現在の1.8〜4.4倍になると予測されている。水害に詳しい九州大の小松利光名

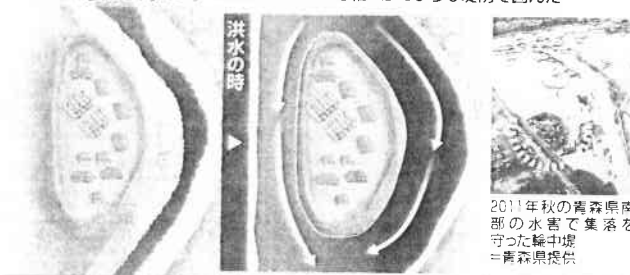
教授は「温暖化で災害の威力は増加するの、防災力はインフラの老朽化で減少する。ギャップが広がる」と甚大な被害となって社会がパニックになりかねない」と警告する。「想定外」では済まされない。被害を軽減させる適応策の考え方がますます重要になっている。3月に横浜市で公表されるIPCCの新しい報告書でも、この点がさまざまな分野で強調される見込みだ。

木曾三川流域にあった 伝統的防災の知恵

●霞堤(かすみでい) わざとあふれる場所をつくって下流の洪水を防いだ



●輪中堤(わじゅうでい) 集落や田畑などを輪かのような堤防で囲んだ



2011年秋の青森県陸奥郡の水害で守った輪中堤 =青森県提供

●上げ仏壇 洪水の時にロープで2階に引き上げていた



●水屋 敷地内に避難用に高台を作り、非常食などを保存していた



参考情報 温暖化影響を知るには文部科学省、気象庁、環境省が作成した報告書「日本の気候変動とその影響」がネットでも入手できる。

岐阜県「伝統的防災施設」をもとに作成